

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

| | |
|------------|---|
| Title | 日本語の敬語について |
| Author(s) | 何, 国栄 |
| Citation | 日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集, 1990 : 147 - 153 |
| Issue Date | 1991-03-01 |
| DOI | |
| Self DOI | |
| URL | https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00039292 |
| Right | |
| Relation | |



日本語の敬語について

何 国 学

序

敬語は日本語の特色の一つである。敬語は日本語の内容を豊かにし、文の美しさ、雅やかさを増し加えると同時に人々にわずらわしさと複雑さを感じさせてしまう。日本の敬語は日本の特有の社会環境の中で生まれる一種の特殊な言語現象であり、日本語の主な組織部分であり、特殊な使用の規範を持っている。戦前規範としての敬語は、皇室敬語を中心とするもので、君臣、父子、長幼の序、上下の分を言語的に示すためのものであった。従って、敬語の教育は国語教育としてよりも修身、作法、礼法の教育の一部として行われたのであった。しかし、昭和20年（一九四五）8月15日の敗戦によって、大日本帝国は消滅し、華族制度も無くになり、軍隊も解散した。代って天皇を象徴とする日本国が民主主義国家として誕生した。昭和21年（一九四六）1月1日には、天皇が自ら「現人神」に非ずという、神格否定の所謂人間宣言を発した。こうした価値観の一変した大激動の時代に旧制度の遺物として、これからの日本に敬語は無用の長物だとする敬語廃止論が声高に叫ばれた。この時代に、戦前のままに敬語を保持しようという声は聞かれなかったが、敬語保持派は、民主主義は個人の相互尊重が基本であるから、敬意を言語的に示す敬語は簡素化して残すべきであると考えた。その公的な現われが、昭和27年（一九五二）5月に、国語審議会が文部大臣に建議した「これからの敬語」である。

「これからの敬語」は、新時代の日本にふさわしい敬語のありかたを示したものであるとして教育、公用語、新聞、放送、出版から国民生活にまで広く影響を及ぼしつつ今日に至っている。その「基本の方針」を見ると、戦前の規範としての敬語と戦後の敬語との相違点がはっきり分った。

第一、これまでの敬語は旧時代に発達したままで、必要以上に煩雑な点があった。これからの敬語は、その行きすぎをいまいしめ、誤用を正し、できるだけ平明・簡素にありたいものである。

第二、これまでの敬語は主として上下関係に立って発達してきたが、これからの敬語は、名人の基本的な人格と尊重する相互尊敬の上に立たなければならない。

確かに、昭和20年を境に、戦前戦中の天皇を頂点とする身分秩序的な敬語が戦後の民主主義的相互尊敬的敬語へと転換を遂げることになったのである。「です・ます」調の標準語の敬語を使っている人が大多数になっている。しかし、社会上の対人的接辞、企業、役所等々の職階制による上下関係、年齢、性別との違い、文化の教養などによって敬語の使い方はずいぶん違っている。例えば、商業方面で奉仕の精神を取り違えて、不当に高い尊敬語や、不当に謙遜語を使うことが特

(2)

に多かった。また、年よりの女性、修養の高いアナウンサーなどは不当に尊敬語、謙遜語を多く使っている。そういうことによって、知らず知らず自他の人格的尊厳を見うせらなってしまう。しかし日本の敬語は新旧交差の変革の時期にある。イキル煩雑な敬語が消えつうけて、新しく、平明、簡潔な敬語が受け入れられると信じる。

このレポートで、一、敬語とはというものが。二、不当に思いながら現実生活でよく使われる敬語の実態はまたどうなるのか。三、これから日本語の敬語教育において改善すべき点は何であらうかについて研究してみたい。

第一節、敬語の定義について

学問的には人によって色々に定義づけ、分類するが、普通“美化語”を別格として、“尊敬語”、“謙遜語”、“丁寧語”の三種類の語を統括した名称であり、従って、三種の中のどれを用いてみても、直接、または間接に、その強弱の程度の差こそあれ、結局は相手方を敬うこととなる。

（一）、^{尊敬語は}尊敬語：話し相手も含め、語の対象となっている人について一般より高めて表現するもので、相手方を直接上に置いた言い方をし、上位を主体として表現するところの敬語である。主として相手方に関する言動や事柄、呼称等を直接に敬うために用いられる特別なことば遣いである。現在よく用いられている尊敬語は大體次のようになる。

1. 尊敬の意を持つ動詞。
いらっしゃる、おっしゃる、召し上がる、なさる、あがるなど。
2. 尊敬助動詞「れる」、「られる」を添える言い方。
3. お + { 動詞連用形 } + になる、くださる、など
ご { サ変格動詞語幹 } なさる、あそばす
4. お + { 動詞連用形 } + です
ご { サ行変格動詞語幹 }
5. お { 形容詞・形容動詞・副詞など }
6. 人を指す言い方。
この方、どちらさま、お宅さま、あなた
7. 名字 + 接尾語。
～さん、～さま、氏、殿、先生、閣下、
8. 名字 + 職業 + 学長、団長、大臣など。

（二）、謙遜語。

謙遜語は謙遜語とも言い、自分を相手方より下に置く言い方で、下位を主体として表現する敬語である。つまり、相手方に対して、自分

側の言動や筆柄、呼称等と違って低く表現するために用いる特別なことば遣いである。その結果、間接には相手方を高めて敬うことになる。謙讓語の用法内容は大体次のようになる。

1. 自分側を指す言い方。

私、手前ども、小生など

2. 自分側の所属、所有する物事を指す言い方。

愚輩、家内、拙文、愚見、粗末、弊社など

3. 自分側の言動を表す言い方。

致す、申す、申し上げる、伺う、参る、いたたく、おげら、差しあげら、承る、拜見する、存じら、賜わらなど

4. 補助動詞を添えた言い方。

お願い申す、存じあげら、承知仕ら、お祝い申し上げらなど。

5. 型にはまっせ言い方

お + { 動詞連用形 + } いたす、申す、いたたく、申し上げらなど
ご + { サ変語幹 }

〈三〉丁寧語：

丁寧語は対者待遇表現で、つまり、相手を意識しての特に対者意識の働きから表現される敬語で、相手に対して、ただ話しぶり自体を丁寧にするために用いる特別なことば遣いである。具体は例を挙げると、次のようである。

1. 特殊な語を用いる言い方。

お感うございます

2. 接頭語を添える言い方。

お茶、お水、ご家族、ご年輩、ご来訪、お電話、お客等。

3. 助動詞を添える言い方。

ご紹介いたします、雑誌です、いらっしゃいませなど

4. 動詞連用形 + てまいります、ております。

5. …… + いたします、存じます、申します。

6. 代名詞。

あちら、こちら、どちら、(あっち、こっち、こっち)。

勿論、人によって、以上の三種のほか、美化語を合せる人もいるが、ここでは省略したいと思う。以上は敬語の分類と概念である。尊称語は相手を持ち上げる言葉であり、謙讓語は自分がへりくだる言葉で、どちらもコミュニケーションの中に上下関係が含まれるが、丁寧語にはそれがない。物事をただ丁寧に表現するだけのことだ。だが、相手に対する物言いを丁寧にしようとする意識に基づいて、相手に対して

(4)

ていねいな物言いをしようとする意識が働いているという意味で相手の位置づけが行われていると言える。従って待遇表現の一種とすることが出来る。だから、どちらを使っても相手に対して敬意を持っている。辻村敏樹は「敬語を左右する最も大きな条件」として、次の四項目を付一項目を示した。〈「日本語の敬語の構造と特色」『岩波講座日本語4・敬語』51～56ページ〉。

〈A〉上下関係——〈1〉同一組織内の地位。〈2〉社会階層。〈3〉年齢。〈4〉経歴の長短。下位の者から上位の者へ敬語を使う。

〈B〉恩恵、負い目の関係——医者と患者、客と商人、教師と生徒、などの関係。恩恵、負い目を感じる側から敬語を使う。

〈C〉力関係——権力、腕力など力を持つものと力のない者との関係。力のない者から敬語を使う。

〈D〉親疎関係——疎い者には敬語を用い、親しい者には敬語を用いない。

〈付〉対女性の関係——現代社会における女性尊重の傾向による男性から女性への敬語使用。

これらによって、敬語表現が選択される際に働く対人関係(人間関係)の種類相が明確化されている。しかし、人口の都市集中、第三次産業人口の増大、企業、役所等々の対人処交術と職階制による上下関係とががらみあうこと、また複雑化した人間関係などによって、日常生活の中で使っている敬語は辻村敏樹氏の述べたとおりにならないのが少なくない。では、日常生活の中の敬語はどうなるのか。次に具体例を挙げながら分析したいと思う。

第2節. 現在の日常生活の中の敬語。

テレビなどを見たり、日本人とつき合ったりして、気になる敬語の使い方に気がつくことがしばしばある。まず毎週日曜日のNHKのど自慢の司会を務める際の司会者の敬語の使い方を考えていこう。

歌を歌った若者に対する司会者の言い方。

「ちょっと伺いますが、どちらからいらっしゃった方のごぞいますか。お仕事はどうか関係で？」

というような言い方では、相手〈若者〉に対しては「いらっしゃる、拝見語「方」、拝頭語「ご」、「お」などの敬意を充分払っている一方、肝心の聴衆である聞き手に対して「伺います」という謙敬語を使って、敬意を見せている。司会者として使う言葉は語勢と聞え手と、そして司会者との三者の関係において、どちらの相手にも失礼に当たらないが、詳しく考えてみたら、五十才ぐらいの司会者は若者である相手に対して尊敬語「いらっしゃる」、拝見語「方」、拝頭語「ご」、「お」ばかりを使って、尊敬しすぎるのではないだろうか。また、司会者としての卑下した希求の情も籠っているということも強く感じた。次に「気がつけば、騎手の女房」というドラマ中の親子の会話を

見ていこう。

母親：「あの方く娘と恋をしている悪奴を指す）、学生時代からしつかりした方だったけども、お若いのにきちんとご挨拶にみえて、立派なおばりになったわ。」

娘：「ちょっと立派すぎるってどこあるのよ。」

母親：「まあ、なに言っているの、警察言っって、でも大丈夫かしら。」

娘：「ふん？」

以上の短い会話から見れば、一連の敬語を使う母親の言い方は不思議に思っって、授業を担当する先生に「今、日本の家庭では親は娘の悪人に對することはそんなに敬語を使うのですか。」と聞くと「普通の使い方」と答えてくださったので、驚いた。やっぱり外国人から見ると敬語は難しいなあと思う。年齢の上下関係とか、恩恵、負い目の関係とか、親疎関係く将来自分の花婿だからそんなに疎くないだろうとかから見てもそんなに丁寧な敬語を使う必要がないのではないかと思うのだ。それも日常の暮らしで使っている敬語の難しさだろう。

次にふたたびあるテレビドラマでの夫婦が口げんかをしたばかりの後の対話を聞いていこう。

夫：「新聞を取ってくる？」

婦：「それぐらい、ご自分でなさったらどう？」

以上から見れば、妻のほうが「ご」、「なさる」を使ったが、もし普通の夫婦が仲良い時、こういう距離を置く敬語を使ってしまったら、不自然なよそよそしさを感じさせる。夫婦間の親密さをとまたげることになる。つまり、敬語はへだてのことばであって、心理的な垣根のある間がらや、ばあいに使われるものであり、また、垣根を作るものである。そう考えると、敬語使用と敬意とは必ずしも一致するものではないことが分った。だから、普通、ある場合に先生は学生に対して丁寧すぎることは使わないのがあって学生が困っている。それはいつたへだてなのか、それとも品格、装飾、威厳を保つのか。

続いて、次ぎの例を見ていこう。6月8日午後三時にNHKテレビを見て、ある女性アナウンサーはXX所に迷っている観光客を案内できる犬がいるようで、取材に行った。彼女の思ったとおりに目的地に連れていった。アナウンサーは視聴者にこうやって次のように言った。

「今日、ワンちゃんはずっと探事に連れて行っていただきました。」

と女性アナウンサーの言ったのを聞いてびっくりした。「いただく」は国知の通り謙敬語なのだ。つまり、話題の下位者の上位者に対する行為表現とおして、話し手が上位者への配慮をあらわす敬語だ。犬に目的地に連れられたアナウンサーはいくら嬉しくても、わざわざ自

(6)

分を犬の下に置いて謙讓語を極う必要がないのではないか。でもこういう言い方は日常生活で少なくないだろう。

次にもう一度あるテレビドラマでの二人の女性の対話を聞いていきたいと思う。その二人の女性をA、Bとして、A女性はB女性が自分の夫との不倫関係があったことが分った。次はある日、その二人が出合った会話なのだ。

A: 「夫と離婚してさしあげるわ。」

B: 「……。」

ちょっと聞くと、A女性は度量が大きいなあと思う。人を見るかも知れない。だが、それは敬讓の表現という本来性を逆用して、皮肉の表現である。夫がB女性と不倫関係で、夫を奪われるA女性の憤りの気持ち誰でも分った。ここではわざわざ「さしあげる」を使って、軽蔑・皮肉等の効果と表現したがるのは効くかどうか疑問なのだ。もし直接に怒りを表現したらもっと効果が良いのではないか。日本人は婉曲な表現が好きなのだが、こういう場合で謙讓語を使って軽蔑・皮肉を表現するのは世界では珍しいのではないだろうか。

次に六月九日にメキシコサイリス大統領が日本を訪問する時にNHKの夕時のニュースの時のアナウンサーの言葉だ。

「サイリス大統領は十日まで日本に滞在し、おしは天皇にお会いするほか、通商総理と会談する予定です。」

日本人はこういう言い方を聞いたら、何も変なことはないが、私には理解できない所がある。敗戦によって、天皇を象徴とする日本国が民主主義国家として誕生した。昭和21年には、天皇が自ら「現人神」に非ざらぬと神格否定の所謂人間宣言をされた。それによって、天皇を国民の一員で、天皇に対して使う言葉も同じであるべきであるが、いろいろの意識によって今でも天皇、皇室に関する言葉は皆尊敬、謙讓語ばかりを使う。特に、上のような言葉の使い方はほとんど通商総理より天皇がずっと偉いという感じがする。これも皇室を敬い奉る反映があると言えよう。

最後は「豚足」について話したいと思う。いままで学部の先生から何回も「うちの豚足は……」という話を聞いた。勿論、「豚足」は自分の子供のことを指す謙讓語であるが、たぶん私は豚を嫌うせいだ。「豚足」を聞くと、すぐ「豚の手」を連想してしまってどうも悪いイメージを持つようである。特に、あるおられた場合で、「豚足」という不吉に似て過ぎることばく私の考文を極うないほうがいいのではないだろうか。いくら自分の子供だと言って人格を尊重すべきであると思う。

まとめ

以上の例は私が日本に来てから気がついた中のほんの少しなのである。そのような例はほかの留学生も気がついたと信じている。こうい

う例は変だと思いが、現実ではよく使われている言い方なのである。だから、帰国してから、学生にテキストの中の敬語も教えると同時に日常生活における生き生きした敬語も教えるべきだと思ふ。

参考文献

| | | | |
|-------------|---------------|-------|------------|
| 岩波講座日本語4・敬語 | 大野喬 柴田武 | 岩波書店 | 77. 5. 13. |
| 現代敬語研究 | 大石初太郎 | 筑摩書房 | 83. 4. 28. |
| 敬語の使い方 | 大石初太郎 林 四郎 | 明治書院 | 75. 9. 15. |
| 敬語 | 西田直敏 | 東京堂出版 | 87. 9. 25. |
| 白語點點痛痛 | 商務印書館 〈香港〉 | 商務印書館 | 89. 8. |
| 日本人と敬語 | 奥山益郎 | 東京堂出版 | 72. 3. 15. |
| どこがおかしい日本語 | 吉沢典男 | ごま書房 | 85. 12. 20 |